

3. コミュニケーションを目指す英語学習の構想と展開

平田 和人

はじめに

「コミュニケーション能力」というのが今の英語教育のキーワードである。この言葉を使わずに現在の英語教育を語るのは不可能と言ってもよい。中学校、高等学校と6年間英語を学習し、身に付かないために英語教育を恨めしく思わせてきた能力でもある。最近では、各種の文化センターなどの講座には必ず何種類もの英会話講座が設けられ、英会話学校も繁栄している。

このような現実には、ファッションとかブームという趣味のレベルで論じられがちな現象ではあるが、今の国際化時代がもたらしたコミュニケーションに対する強い指向の現れでもある。

学校の英語教育は、これまでコミュニケーション能力を無視してきたというわけではない。およそ言語を学習しようとするときに、その基本的な機能であるコミュニケーションを忘れていた訳ではなかった。従来から学習指導要領は、英語をコミュニケーションの手段として学習することを目指し、いわば、内側からの改善を目指してきたといえる。

現在の状況にみられるコミュニケーション指向は、国際化社会の到来という、言ってみれば外的要請によってもたらされたものであり、単に一外国語の技能の習得という観点ばかりでなく、これからの社会に生きる生徒たちの資質や能力、従ってその学力観とも密接な関わりをもつ能力の一つとして捉えられている。このような「コミュニケーション能力」の育成を目指した高等学校での英語教育の改善の方向について考えてみたい。

1. 高等学校における英語教育の現状

上記のように、これまでの英語指導はコミュニケーション能力を不要なものだと考えてきた訳ではない。言ってみれば、学校での英語学習の方法は基本的には正しく、コミュニケーション能力は必要に応じて付随してくるものであるという捉え方であったと言える。必要に応じて付随するものであるから、学習そのものから直接獲得する能力ではなかった。言ってみれば、コミュニケーション能力の「基礎・基本」として「潜在的に」備わるものとしての学力を目指して来た。しかし、現実には付随するものと言う割には、コミュニケーション能力が必要となった時に実に多くの精神的負担とエネルギーを要するものなのである。

このような状況の中から、現行の学習指導要領が登場してきたといえる。

現行の学習指導要領は、「コミュニケーションへの積極性」を英語教育の目標として明確に掲げている点で従来の学習指導要領よりも一層コミュニケーション指向が強いと言える。外国語の目標は、①外国語を理解し、外国語で表現する能力を養い、②外国語で積極的にコミュニケーションを図ろうとする態度を育てるとともに、③言語や文化に対する関心を高め、国際理解を深める、という3つの要素から成っている。そして、新しい科目である「オーラル・コミュニケーションA」「同B」「同C」が登場し、その内の少なくとも1科目が外国語の必修となっているのである。このことから、いかにコミュニケーション能力の育成に重点が置かれてい

るかが分かる。しかし、教育課程のうえでオーラル・コミュニケーションが掲げられていても、標準単位が2単位であるものが1単位であったり、2単位の内の1単位はALTとのTTに当てられるが、残りの1単位は文法になっているというようないわば「内輪の話」を耳にすると、このコミュニケーション指向の動向に応えられる教育が高校の英語教育の中で実現されつつあるのかということには疑問が残るのである。

その理由として、これまで行われてきた英語教育とコミュニケーション能力の育成という課題の接点が十分に把握されていないことが挙げられる。また、コミュニケーションという言葉の意味する内容も日常会話から、マス・コミュニケーション、自然とのコミュニケーションというものまで含めて考えているという現状がある。このようにさまざまなコミュニケーションに対する思いがあり、英語教育のなかでコミュニケーション能力の育成といっても多様な指導にならざるを得ないのである。

2. コミュニケーション能力を捉える視点

どのようなことができればコミュニケーション能力があるといえるのであろうか。今の国際化時代に要請されるコミュニケーションという観点から考えれば、コミュニケーションは一般的に次のような特質を持つと考えるべきであろう¹⁾；

- (a) 社会的相互作用 (social interaction) の一つの形式であり、社会的相互作用のなかで身に付け使用される
- (b) その形式と伝えられるメッセージには、高度な予測不可能性と創造性がある
- (c) 談話や社会文化的な状況が適切な言語使用への制限となると同時に、発話の正確な解釈の手掛かりにもなる
- (d) 記憶の制限、疲労、動揺などの心理的及びその他の制限のなかで行われる
- (e) 常に目的がある (社会的関係を結ぶこと、説得、約束など)
- (f) 手が加わったものでなく、自然な言語が使用される
- (g) 成功、不成功は結果によって判断される (コミュニケーションの目的が達成でさたら成功である)

上記のように、コミュニケーションをする力は極めて複合的であり、英語でのコミュニケーション能力の育成は、このような複合的な技能の習得を目指さなければならないものである。

一般的に技能を習得するには、その技能についての情報、練習、体験などが不可欠である。この場合の情報とはコミュニケーション能力に必要な知識であり、練習とはそれを習得する方法の問題であり、体験とは目標とする能力の目指す方向性と言えるだろう。

つまり、英語学習の改善を考える視点としては、

- (1) 知識として何を持つ必要があるのか (学習内容)
- (2) それをどのように学習するのがよいか (学習方法)
- (3) それによってどのような学力を目指すのか (学力観)

という三つの観点が少なくとも必要であろう。

3. コミュニケーション能力にかかわる学習内容

これまでの英語学習で与えられる知識は、コミュニケーションのもつ性質を考慮するとき適切なものであると言えるであろうか。

言語の知識は、勿論それを書きしるす文字や綴りも重要であるが、機能面から言って音声と意味に関わるものが中心である。これらの二つの視点から、どのような知識が必要かを考えてみたい。

(1) 音声に関わる知識

音声については、これまで文字を中心とする学習に偏り、あまり重点が置かれてはこなかった。訳が重要な位置を占め、コンマやコロンのいった表記上に現れた微妙な意味が問題とされることがあっても、音声は内部的な文字処理の道具としての役割が主であり、バランスを欠いていたといえる。これまでもⅡAなどの音声を重視する科目があったが、教育課程に登場することは少なく、総合科目といわれる科目のなかでの言語活動は、「読むこと」「書くこと」への偏りがあった。しかし、現実のコミュニケーションを考えると、音声の重視は避けられない。「オーラル・コミュニケーション」という、文字どおりその名のついた科目が必修として登場したのも、言語活動「聞くこと、話すこと」が「聞くこと」「話すこと」と別々の言語活動として重視されることになったのもこのような背景がある。

先程挙げたコミュニケーションの性質として、

- ① 手が加わったものでなく、自然な言語が使用される(上記(f))
- ② その形式と伝えられるメッセージには、高度な予測不可能性と創造性がある(上記(b))
- ③ 社会的相互作用(social interaction)の一つの形式であり、社会的相互作用のなかで身に付け使用されるものである(上記(a))

などがあるが、これらは、どのような音声の知識が必要かという面で重要な意味をもっている。現実の口頭でのコミュニケーションで使われる音声は物理的な連続音である。学習用に手が加わったものであっても同様である。辞書の中にある発音記号は、個々の音声に割り当てられていて同じ記号は常に物理的にも単一の音声を意味していると思われがちであるが、コンピュータが作りだした音声の合成が不自然であることからわかるように現実にはそうではない。さまざまな音声的な環境などによって変化を受けたものを自然と感じている。また、一方的に次々と消えていく連続音であるから、あらかじめ調べておくこともできなければ、処理する時間にも制限がある。

このように、音声についての知識とは音声についての処理のプロセスに関わるものである。それは、基本的にはデジタルーアナログの相互変換のプロセスなのである²⁾。

「聞くこと」に関わる知識は、物理的に連続した言語音を分節する知識、つまりアナログからデジタル化をするための知識である。デジタル化によって、音声は単語や句、文になりそれぞれの意味となるのであるから、「聞くこと」の最も基本的な能力といえる。英語を聞き取るためには英語に特有の音声についての知識が不可欠である。

「話すこと」についての知識は、デジタルからアナログ化するための知識である。それぞれの意味の単位を音声にコード化(encode)し、発音器官を通して連続した音声にかえる知識

である。この場合も日本語とは異なる英語の音声についての知識を活用することになる。「聞くこと」と異なり、その知識を調音器官による物理的運動に変換する作業があるので、その正確さには個人差が現れやすい。コミュニケーションという観点からは相手に理解されることが最低限の知識となる。このように、音声についての知識は、音声と意味とをつなぐプロセスであり、口頭でのコミュニケーションにおいて果たす役割は大きく、その知識をもっと重視していく必要がある。

(2) 意味を構成する知識

音声に関する知識と比較すれば、意味に関する知識は従来から非常に重視されてきた。

英語学習において主として与えられてきた知識は、

- ① 単語などの語彙に関する知識
- ② 語や句を結合して文にする文構造に関する知識
- ③ 文と文を結合して、パラグラフなどのより大きな単位とする知識
- ④ 文の意味理解に必要な語彙にかかわる文化的知識

などである。これらは、英語という言語を学ぶときのいわば骨格と考えられている知識である。

単語や語彙についての知識には、辞書的な意味とともに名詞、動詞などの文法範疇についての情報も入る。また、語（句）から文を構成する知識の中には、主語や目的語などの文法関係を中心とする、いわゆる文型に関する知識とともに能動文や受動文、there 構文といった構文についての知識も含まれている。これらの知識を使って、語句の意味から文の意味を段階的に構成する。具体的には、構造の中に語彙をはめ込むことによって意味は構成され理解される。勿論、語句のなかには、熟語とか語法といった語と語の選択制限にかかわる知識とその意味も入る。例えば、lookは「見る」という意味だけでなく、look at, look forward to-ing, look afterなどと言った知識である。また、文の結合についての知識は、等位／従属接続などの結合関係を含めた接続詞の知識や節を越えて使用される代名詞などに関わるものである。これらは一般的に統語論や意味論の分野に属する知識といえる。これらの知識を活用して意味の理解をする過程でその解釈に必要な文化的知識も加えられる。

これらの知識がコミュニケーションという観点から見直して十分なものであれば、これらの知識を使用することによってコミュニケーションは可能ということになるので、ここではその知識の性質を考えてみたい。

上記の知識によって得られる意味とはどのようなものであろうか。言語表現として、意味的に正確であり完全であつても具体的なコミュニケーションの場で十分に機能しない場合がある。コミュニケーションは、常に目的を持ち、成功、不成功はその結果によって判断される（前記(e)(g)）のであるから、文法的に完全な文が必ずしもコミュニケーションの目的を達成するために最善であるとは限らないし、また、文法的に誤りのある文が十分に目的を達成し、コミュニケーションとして成功ということになる。上記の意味は、コミュニケーションでの意味を担ううえでの手掛かりであり、それをもとにさまざまな意味が加わってコミュニケーションが行われている。

このようなコミュニケーションで伝えられる意味には次の三つのレベルが考えられる³⁾。

- ① 字義どおりの意味 (literal meaning)
- ② 機能的な意味 (functional meaning)
- ③ 社会的な意味 (social meaning)

字義どおりの意味とは、辞書と文法によって構成される意味であり、基本的には語彙とその指示対象物、語彙間の関係によって規定されるものである。機能的な意味とは、コミュニケーションを行う者が目的をもって言葉を使う場合の意図としての意味である。意味を伝えようとする者の意図とそれを受ける者の解釈に差があれば、それが誤解となる。送り手も受け手もそれぞれが独自に意味付けを行うのであるから常にその可能性は孕んでいる。字義どおりの意味と機能的な意味の差が大きければそれだけ、コミュニケーションの当事者の間でそのギャップを埋める努力が必要となる。コミュニケーションが生じている場の状況や当事者の間の関係についての知識など言語自体を離れた意味が重要になる。また、その使用される言葉には当事者の社会的な立場や関係が反映されるものであり、それらが考慮されて意味が解釈されることも多い。社会的な意味とはこのような社会が反映された意味といえる。コミュニケーションは、「社会的相互作用 (social interaction) の一つの形式であり、社会的相互作用のなかで身に付け使用される (前記(a))」のものであり、「談話および社会文化的な状況が適切な言語使用への制限となると同時に発話の正確な解釈の手掛かりにもなる (前記(c))」とは、このようなさまざまなレベルの意味が内在していることを表している。

では、このような②③に関わる知識はこれまでの英語学習の中で全く与えられてこなかったかと言えば、そういう訳ではない。書かれたテキストを理解する過程でもその場面や文脈 (context) として注意が払われてきた。コミュニケーションという観点からも重要なテキストを理解するのに必要とされる知識をみてみたい。

コミュニケーションとしてのテキストを成立させる性質は、そのテキスト性 (textuality) と呼ばれ、①結束構造 (cohesion) ②結束性 (coherence) ③意図性 (intentionality) ④容認性 (acceptability) ⑤情報性 (informativity) ⑥場面性 (situationality) ⑦テキスト相互関連性 (intertextuality) の七つの要因によって規定され、これらの一つでも欠ければテキスト性がなくなると考えられている⁴⁾。簡単に言えば、①は文法的な整合性、②は意味の一貫性、③は意図の存在、④受け取る側の容認可能な程度⑤新情報の量、⑥場面との関連性、⑦他のテキストへの依存度、ということができる。

次のような「あいまい文」の理解からこれらの要因の意味を考えてみたい⁵⁾。

(a) “I saw the ship with the telescope ”

(b) “Why did he search the house ? ”

“ He searched for John ”

(a)の文は、withの意味によって二つの意味に解釈できる。一つは、withが手段を表し、「望遠鏡で船を見た」という意味であり、もう一つは、空間的な関係を表し、「望遠鏡を備えた船を見た」という意味になる。with the telescopeは、前者では見るという行為に関係付けられるが、後者では船を修飾しているという知識が生かされている。(b)の対話文では、forの意味によって「ジョンに頼まれて」というような意味なのか、「ジョンを捜して」という意味かあいまいである。このような知識は英語を理解する上で重要なものであると考えられている。

しかし、これらの文が実際にコミュニケーションの場で使用されるとき、話し手はどちらの意味で with なり for なりを使っているか知っているに違いないし、通常それが理解されてコミュニケーションは成立する。ここで特に重要な働きをする要因は、意図性、容認性、場面性などである。話し手がどちらかの意味を意図しており（特にあいまいにしたいという意図がなければ）、それが場面などから聞き手に容認されてコミュニケーションが可能となる。これらが他のテキストに基づいて発せられた文ということであれば、テキスト相互関連性も関わることになる。テキスト性によってこれらの文はあいまいでなくなっているのである。

このような文のあいまいさは、その意図した意味だけが伝わるように語彙や構造が自動的に選択されてくるわけではないということに起因している。従って、語彙や構造が与えてくれる結束構造や結束性に関わる言わば静的な知識は、文があいまいであるという分析を与えてくれるが、コミュニケーションを行う場合の情報としては不十分である。コミュニケーションは言わば動的な、さまざまな要因が総合的に活用されて成立していることを理解する必要がある。

4. コミュニケーション能力を育成する学習方法

このような知識は、それではどのようにして学ばれるのであろうか。これらの知識を獲得する過程は学習指導要領では、言語活動として規定されているものである。言語活動の内容によって知識のレベルが決定されるのであり、言語活動は英語の授業の質を決定するものと言える。言語活動を捉える視点を考えてみたい。

まず、一般的に隆盛である（あった）訳読方法はコミュニケーション能力の育成には向かないという指摘があるが、その主な特徴は次のようなものである⁶⁾。

- ① 目標は、文学、精神修養や知的発達であり、文法の訳への応用が主となる
- ② 読み書きに焦点がある
- ③ 語彙は使用されるテキストから選択され、訳語と辞書と暗記による学習である
- ④ 文が指導と練習の基本単位であり、訳をすることが中心である
- ⑤ 正確さが強調される
- ⑥ 文法は演繹的に指導され、シラバスは文法事項の配列である
- ⑦ 母語が指導の手段として使用される

訳読方法はそれを支える学習理論がないと言われるが、この方法によって与えられる知識や練習はコミュニケーションの性質という面からみても偏りがみられる。

読み書きが中心であるから音声についてのプロセスは基本的には必要がない。デジタル・アナログの操作は、行われても内部処理用であり正確さの規準はなく、そのための適切な練習も必要でない。意味に関する知識から言えば、訳をするという性質上結束構造や結束性が学習の中心となる。

特に問題となるのは、指示の作用である。文や談話のなかで他の名詞や代名詞への照応はあっても、言語外の世界を指すということは必要ではないのである。コミュニケーションに必要な場面性が訳という形で処理をされるために、例えば、that woman there は現実の女性を指すことはなく、「あの向こうにいる女性」という表現になり、そのことに対するあいまい性の解消というコミュニケーションにとっての重要な側面が落ちているのである。

これらから、コミュニケーション能力の育成に必要な言語活動を考えていくうえでの示唆が得られる。さまざまなレベルの知識を学習するためには、その性質を満足させるような状況を教室内に生み出していくことが言語活動の要点になる。

言語活動には、その知識によって、発音練習や特定の文法項目に焦点を当てた部分的な技能練習 (part-skill practice) からさまざまな技能を組み合わせる実際のコミュニケーションに近い総合的な練習 (whole-task practice) までさまざまな段階を考えていく必要がある。

段階的に言えば、

- ① 社会的相互作用のない段階から高度な社会的相互作用のある現実のコミュニケーション (authentic communication) の段階
- ② 使用される形式や伝えられるメッセージをあらかじめ限定し、全て予測可能な創造性のない機械的な練習から、限定のない高度に予測不可能性で創造的な面をもつ段階
- ③ 言語活動の場面を限定し、言語使用の幅に制限を加える段階から限定のない段階まで考えられる。教室内の言語活動をこれらの段階から見直し、そこで活用される知識に偏りがないかを検討する必要がある。

また、学習者の視点から授業の評価を具体的に考える必要がある。

- ① 生徒は言語活動の中で英語に接する機会は何どの程度設定されているか。
英語への exposure による知識量と同時にその定着や fluency に関わる問題である。
- ② 生徒がお互いに行う言語活動は何どの程度設定されているか。
言語活動がどの程度言語の社会性を取り込んでいるかという視点である。コミュニケーションは社会的相互作用であり、その疑似的な体験を言語活動に設定し、知識の幅を広げる必要がある。
- ③ 生徒が自己表現をする機会が何どの程度設定されているか。
生徒の使う英語の構造やメッセージが何どの程度生徒の自己責任で決定されているか、また内容の創造性という視点である。生徒が言語活動に積極的な関わりをもてるような状況に授業がなっている必要がある。
- ④ 言語活動が生徒にとって興味や関心の対象となっているか。
コミュニケーションに対する動機付けの視点である。言語活動の中で本当の意味でのメッセージの交換を行うためには、その学習体験が生徒自身との関連性をもっていなければならない。
- ⑤ 言語活動が何どの程度評価の対象となっているか。
言語活動には、その段階に応じて、コミュニケーションにいたるプロセスが適切な評価の対象となる必要があるだろう。

授業における言語活動は、言語を材料として行う実験である。材料とそれについての知識を活用しながら、構造とメッセージを作り出す作業である。自然の材料が温度、湿度、気圧などの物理的な環境の違いによって異なる反応をするように、コミュニケーションの内容はその相手や場面などの違いによって異なってくる。言語活動はそのようなダイナミックな要素を取り入れた動きのある活動となる必要がある。

5. 新しい学力観からみたコミュニケーション能力

コミュニケーションは、情報を処理することによって行われる。コミュニケーション能力とは、言語的情報を取り入れ、さまざまな知識を駆使して処理をし、新しい情報を生み出していく能力である。外国語でこれを行うには様々な困難が伴う。扱う情報の複雑さ、使用される言語の複雑さ、使用する言語に求める水準、時間的制限・プレッシャー・予測不可能性などが高くなれば、それだけ外国語であるがゆえに情報処理の容量が限られ困難は大きくなる⁷⁾。言語を理解したり、構成したりする過程では多くの対応が必要であり、これまで取り上げたさまざまな知識を下敷きとし、過去の経験を生かして判断をし、表現することによって、絶え間なくその状況に働きかけ、それに変化を与えていく過程である。表現力の弱さは、言い換えれば、現実への働きかけの弱さということであり、現実との接点が少ないといえるのである。また、自己を表現するということは、同時に自己への働きかけであり、自己理解を深めることに役立つものである。何を表現するのか—どのように表現するのか—それがどのように理解されるのか、という過程を考える中で総合的な思考力や判断力が必要とされ、育成されていくといえる。新しい学力観は、そのようなプロセスを重視するものである。コミュニケーションを体験によって学ぶということは、このようなダイナミックな状況のなかで、その状況に対応した意味を受け取り、それを適切に判断して解釈し、意味を生み出し、その状況に変化をもたらすということであり、それこそが今、学力として求められているものである。

ま と め

コミュニケーション能力を育成することが英語教育の大きな課題である。そのためには、念頭におくべきコミュニケーションとはどのようなものなのか、また、その能力の育成にはどのような知識が必要であり、それはどのようにして獲得されるのかを捉えることが大切である。それらは、けっして静的な知識を積み上げたものではなく、状況というダイナミックな動きをするものに、対応し、働きかけ、変更をもたらすものである。そこで必要とされるのは、思考力、判断力、表現力である。新しい学力観が求める学力はコミュニケーションに必要とされる学力でもある。

〔参考文献〕

- 1) Canale, M. 1983. 'From Communicative Competence to Communicative Language Pedagogy' in J. C. Richards and R. W. Schmidt (eds.) : Language and Communication. Longman.
- 2) Pinker, S. 1995. The Language Instinct. Harper Perennial.
- 3) Littlewood, W. 1992. Teaching Oral Communication. Blackwell.
- 4) Beaugrande, R. de and W. Dressler. 1981. Introduction to Text Linguistics. Longman
- 5) Hipkiss, R. A. 1995. Semantics : Defining the Discipline. LEA.
- 6) Richards, J. C. and T. S. Rodgers. 1986. Approaches and Methods in Language Teaching. CUP.
- 7) Skehan, P. 1995. 'Analysability, accessibility, and ability for use' in G. Cook and B. Seidlhofer (eds.) : Principle & Practice in Applied Linguistics. OUP.